師匠のグッド・バイ

シー・ユー・アゲイン　後日談２

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18609235

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, モブ霊, ♡喘ぎ

（こちらの小説はアップのタイミングがちょっとアレですので、場合によっては非公開にいたします。あらかじめご了承ください。また折を見て再公開はすると思います）高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊の、地獄の後日談です。モブ霊のみ本番してます。♡喘ぎなどが有るので、お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

シー・ユー・アゲイン　後日談２

日課の朝のランニングを終えて。
僕は緊張した顔で携帯の日付を確認する。
――今日、僕は、師匠を買った。
待ち合わせは１時。なのに、緊張しすぎて、夜中に何度も目が覚めてしまった。不思議な気分だ。昨日まで、これまでもこうやって師匠は誰かに買われてたんだよな、とか、お金で僕にも抱かれるんだ、とか、ずっとモヤモヤしてたのに、当日になると、楽しみで仕方なくなってきた。
――僕は、ずっと、師匠が好きだった。
騙し討ちのようにエクボに奪われてからも、気持ちはずっと変わらなくて。
だからいざ、デートできるとなると、行きたいところが溢れ出てきて、コースを決めるのにめちゃくちゃ時間をかけてしまった。
財布の中のチケットをもう一度確認する。映画と、遊園地のチケット。よし、ちゃんと持ってる。
映画、映画館か……暗いし、手、手ぐらい、握ってもいいよね……？
いや、せっかくカップルシートなんだし、き、キスとか、しちゃったり……？
……。
……！
だめだ、いかがわしいことを考えすぎた。こんな時は筋トレだ。筋トレは全てを解決する……！

そして。

筋トレに夢中になり過ぎた僕は、慌ててシャワーを浴びて一張羅を着て飛び出す羽目になった。

※

「……大丈夫か？モブ」
全力疾走してきて、ぜーはー言ってる僕を見て、師匠が顔を覗き込んでくる。
ぐっ……心配顔師匠可愛い。
「だ、大丈夫、です……」
なんとか息を整えて、顔を上げる。
あ。
師匠の左手に、指輪が無い。
ただそれだけのことで、ものすごく嬉しくなってしまうんだから、僕は単純だ。
「本当にいいんだな？」
師匠が神妙な顔して訊いてくる。
何をいまさら。
「いいですよ」
「……警告はしたからな。支払い、すましちまうから、車乗ってくれ」
マサさんが準備してくれた黒い高そうな車に乗る。
……！
え、なんか、師匠から、いい匂いがする……！
「ん」
師匠が差し出した手に札束の入った封筒をのせる。
師匠は札束を扇のように広げて、高速で数え始めた。
「わ、すごい」
「ふふん」
得意そうな師匠可愛い。それにしても、密室になると、いい匂いが、どんどん濃くなって……。
「モブ？」
気がつくと、キスしそうなくらい、師匠に接近してしまっていた。
「あっ、す、すみません。なんか、師匠、今日、いい匂いしません？」
「ああ、香水変えたんだよ。良く分かったな」
札束をマサさんに渡して、師匠はネクタイを緩めて、シャツのボタ

ンを外して、ぐいっと首筋を晒して見せてくれる。
「ココが１番いい匂いすんぜ？……嗅いでみるか？」
ごきゅ、とつばを飲み込んで。
僕は師匠の首筋に顔をうずめた。
頭を痺れさすような匂いの中に、ぶわりといつもの師匠の匂いがする。
……たまらない。
「あっ」
鼻が首筋に触れて、師匠がくすぐったそうに声を上げる。その声がたまらなくて、僕は師匠の肩を押さえて、より深く顔を首筋に押し付ける。
「……カーセックスするなら、移動しますけど」
マサさんに言われてはっとする。
ぼ、僕は一体、何を……！？
「いや、映画の時間があるんで……」
「そっかぁ。……残念」
師匠の目がすぅっと細くなって。
唇が誘うように弧を描く。
そん、そんな顔、みたことない。
ずぐずぐとペニスが痛い。
おかしい、知らない、こんな師匠、知らない……。
最　高　じ　ゃ　な　い　か。
きっとこれは、師匠が恋人にしか見せない顔。エクボしか知らない顔。秘密を知っていく感覚に、胸がスッキリする。
──今度は僕が奪う番だ。
「……抜いてやろうか？」
「す、すぐおさまるんで……大丈夫です」
「よし、じゃあ萎える話をしてやろう。この間お前のお袋さんと偶然会ったんだが」
「あっおさまりました」
無邪気に師匠が笑う。……やっぱり、その顔も、好きだ。

※

「映画ねぇ」
ふむ、と師匠がポップコーンの列に並びながら呟く。
「えっ、もしかして、嫌いでしたか……？」
「いや？映画は好きだよ？ただ……下心が分かりやすいなぁ、と思って」
また、あの目をして。
「なぁ、モブ。……どこまで、して欲しい？」
師匠の指が、ゆっくりと唇をたどる。
ごきゅり、と喉を鳴らしてしまって。
「か、か、か、からかわないで、くださいよ」
そう言うので、精いっぱいだった。

ただ、お陰様で、もう頭の中が『そういうこと』でいっぱいになってしまって。
映画の内容が頭に入ってこない。左隣りに座っている師匠のことばっかり気になる。
手……。
肘置きに置かれた師匠の手をじっと見てしまう。
いつも良く動く、師匠の、手。
こうやって改めてみると、男らしくゴツゴツしてるのに、スキンケアでもしているのか、白くてすべすべだ。
すらりと伸びた白い指が、いつも、唇を押さえて……。
……。
スラックスで手汗を拭く。
僕はそろりそろりと手を伸ばして、……師匠の手に触れた。
「！」
師匠はちょっとこっちを見る。……拒否、されない。僕はあがる息を鎮めながら、すすすと師匠の手の甲を撫でて、ぎゅっと手を上から握った。
やった……！
僕は今、師匠と映画デートしながら、手を繋いでる。
しっ……

幸せだぁ〜……。
しばらく僕は師匠の体温を味わっていたが、重大なことに気がついてハッとする。
これ、手を握ってるだけだ！！
どうせなら、ちゃんと手を繋いで、イチャイチャしながら映画見たい……！
どうにかならないかと手をモジモジさせていると、どうやらその動きに気がついたらしい師匠が手をひっくり返してくれて、
きゅっ、と恋人繋ぎしてくれた。
！？！？！？！？！？
カチンと固まってしまう。
今度こそ何も頭に入ってこない。
恋人、そっか、オプションで恋人コース入れたもんな。
今、師匠は、僕の恋人なのか……。
まいったな……。
それにしても。
落ち着いてくると、逆に手が落ち着かなくなる。
なんというか、師匠、
手が気持ちいい。
すべすべふにふにしていて、……、その、いじりたおしたくなる……。
ちょ、ちょっとだけなら……
触っても、いいかな……？
すり、と中指で手の甲を触ったら。
……止まらなくなった。
すりすりぐにぐにと師匠の手を弄り回してしまう。
はしたない、やめなきゃ、と思いながらも、やめられない。
「……ふふ」
ひっそりと師匠が笑って。
僕の手に……応えてきた。
何度も手を握ったり、離したり、指が絡み合う。
でも師匠が親指と人差し指で輪を作って僕の人差し指と中指をしごくので、カッと恥ずかしくなってしまった。

ぱっと手を離して左手を右手でぎゅっと握る。
それからは大人しく映画を見たけど、ずっとドキンドキンと動揺していた。

※

「面白かったな」
ニコニコしながらポップコーンのゴミを捨てる師匠は、あんな卑猥なことをしたことを少しも匂わせない健康的な笑顔を浮かべている。
僕は、多分、ダメだ……。
「……なんて顔してんだよ。モブ、」
師匠が耳元に口を寄せてくる。
「……えっち」
！？！？！？！？
ぶわりと超能力が漏れるのを何とか押さえる。ことしかできない。
えっちて！えっちて！！この、えっちが！！
「え！？あ！？え！？モブ、悪かった、悪かったって！」
謝られても一度言われたえっちは取り消せないんですよ！！どうしてくれるんですか！！
……もう、泣きそう……。
「もー、仕方ねーなー。ほら、コレ見ろ、モブ」
ぴら、と師匠がなんだか良く分からない写真を見せる。
「……なんですか、ソレ」
「牛の胎盤、と赤ちゃん」
「……なんでそんなモノ持ち歩いてるんですか」
「こういう時のため」
……。
確かに落ち着いた。
「次は遊園地行くんだろ、早く行こうぜ」
でも、するりと師匠が手を繋いできて、また台無しになったのだった……。

※

「……ほんと、お前って分かりやすいな」
「はひっ！？」
コーヒーカップに、メリーゴーランドの馬車。今はお化け屋敷の列に並んでいる。
いや違いますって！あわよくば密着を狙ってたりは……してますけど！知らないフリしてくださいよ！！
「お、俺たちの番だぞ」
ドキドキしながら暗い室内に入っていく。
腰……
いつもこっそり眺めてた、ちょっと普通の人よりも細い腰も、触っていいよね……。
そろりそろりと手を伸ばす。
「どわぁっ！？」
と、暗がりからお化けが飛び出してきて、師匠が抱きついてきた。
というか、飛びついてきた。
「だ、大丈夫ですよ、師匠」
「はーびっくりした……お前キモ据わってんなぁ」
……いやその。別のこと考えてましたので……。
「……モブ？」
ぎゅっ、と師匠を抱きしめる手が。
離れてくれない。
「先に進まないと」
だって。今、師匠を抱きしめているから。
「……モブ」
すぅっと師匠の目が妖しく細くなって。
顔がだんだん近づいてくる。
あ、あの、その、
「あとで、な？」
ふっ、と息を吹きかけられて。
「はひっ！？」
びっくりして手を離してしまった。

息を吹きかけられた唇がじんじん痺れたみたいになっている。
こんな、こんな間接キス、エッチすぎる……。
結局ぼーっとしたままお化け屋敷を通り過ぎ、次は観覧車に向かった。
「……」
じとりとした師匠からの視線が痛い。
ええそうですよ、どうせ僕はエロいことしか考えてませんよ！！
「足元お気をつけて」
係員に誘導されながら観覧車に乗る。
「夕焼けが綺麗だな」
「……はい」
そう言いながら、僕は夕陽に照らされた師匠しか見ていなかった。
お日様色をした髪が、オレンジに光ってキラキラしている。
……眩しいなぁ。
僕は師匠を眺めながら、……座席を移動するタイミングをずっと待っていた。
いやもう。
したい。
観覧車でキス、絶対したい。
「……あの、そっち行っても、いいですか」
緊張でのどがカラカラだ。
「……いいよ。おいで」
優しく笑う師匠が、泣きたくなるほど綺麗だ。
嗚呼。
好きだなぁ。
カゴを揺らしながら座席をうつる。
「キっ、キキキ、キスして、いいですかっ」
「……いいよ」
僕に肩を掴まれた師匠が、すっと目を閉じる。
カゴが頂点に来た時に。
そっ、と僕は師匠と唇を合わせた。
やっ……
柔らかい……

ほんとはこれだけにしとこうと思ったけど、少しだけ……
僕が少し口を開けると、気が付いた師匠が同じように口を開けてくれる。
そろり、と舌を差し込んで。
「んっ……」
脳がスパークした。
あつい。やわらかい。あまい。なにこれ。なにこれ。
「んっ、んうっ、んんっ、っぁ、」
おいしい。きもちいい。たのしい。うれしい。
「ぁうっ、ちょっ、んっ、んんっ！」
しあわせ。しあわせ。しあわせ。しあわせ。
「〰〰〰〰〰〰〰っ、モブ！」
ぐいっと師匠に両肩を押されて我にかえった。
気がついたらカゴの端まで師匠を追い詰めてしまっている。
し、もうすぐ地上だった。
「師匠、キスってすごいですね」
「……知らん」
耳を赤くしてぷいっと顔をそむける師匠が、ただ、可愛いかった。

※

「こ、こんな高そうなところ選んで、大丈夫なのか？」
首都圏の繁華街にある一等地のホテルの最上階のレストラン。
僕が予約できる限界のいい店だ。
「今日は、ここじゃないとだめだったんです」
深呼吸をして。
ポケットから小さな箱を取り出す。
「師匠、エクボと別れて、僕と結婚してください」
ダイヤモンドが散りばめられたティファニーの指輪を差し出しながら、深々と頭を下げる。気分は土下座だ。
「……いいよ」
「えっ」
ばっ、と顔を上げると、愛おしそうに師匠が微笑んでいて。

「俺、モブと結婚する」
ぽろ、と涙が溢れた。
「し、ししょう、ししょう、」
震える手で指輪を左手の薬指にはめる。
「僕、絶対、幸せにします。ししょう、ししょう、あらたかさん、あいしています──」
ぼろぼろ泣きながら告白していると、気がつくと周りの席から拍手が巻き起こっていた。
「おめでとうございます。こちら、お祝いでございます」
騒ぎに気が付いた店の人が小さなワインを持ってきてくれる。
「あっ、すっ、ずびません」
「お写真をお取りいたしますね」
こういうことには慣れているんだろう。店の人が僕のスマホをさっと取って、こちらに向けて構える。
「ほら、モブ」
師匠は左手を掲げて幸せそうに笑って。僕はそれを見て、また泣いてしまった。

※

夢みたいだ……。
こんな、こんなに可愛い人が、僕のお嫁さんになってくれた……。
師匠、もう一生離しません……！
「……モブ、シャワー浴びるか？」
「あっ、はっ、はひっ、はひっ！？」
ホテルの部屋に入ってからずっと抱きしめてしまっていた師匠から、そう言われてどぎまぎする。
おふろ……
洗いっこ、したい……
「一緒に入りたいです」
「ん、じゃあ行こーぜ」
脱衣所に入って。
ネクタイを外そうとした師匠の手を思わず止める。

「あの。……脱がせたいです」
「……ん」
震える手で、師匠の服を一枚一枚脱がせていく。
これから。
これから僕は。
……この人を、抱くんだ。
師匠が下着から足を抜いてくれる。
「綺麗だ……」
「いや世辞はいーよ。俺がいくつだと思ってんだお前」
ほんとに綺麗なのに。師匠はぴかぴかしてるのに。
どうしていつも師匠は、自分の事を褒めてやらないんだろう。
「ほら、脱がしてやるから」
「えっ」
あれよあれよと言う間にジャケットを脱がされ、スラックスを奪われる。
「はい、ばんざーい」
タートルネックのシャツもすぽんと脱がされて、子供みたいで恥ずかしくなってきた。
「下着は自分で脱ぎますから！」
「あ、そう？」
ボクサーパンツを脱いで、脱衣所のカゴに置く。
少し勃ってるのが恥ずかしくて、なんとなく前を隠しながら風呂場に入ってしまう。でも。
「……ちょっと、興奮してきた」
そう師匠に囁かれて、どうでも良くなった。
ボディーソープを手に付けて、ぬるぬると師匠のおっぱいに触る。
「ぁっ……」
ひくんと反応した師匠の手を、僕のペニスの方に誘導する。
「師匠も、触って」
こうやって、洗いっこ、したかった。
師匠の手がにゅるにゅると僕の性器を洗う。皮の内側まで指でさぐられて、ちょっとびくっとしてしまった。
「あ、悪い。痛かったか？」

「いえ、その。大丈夫です」
……ちんちんってそんなところまで洗った方がいいのか、勉強になるなぁ……。
……師匠のも洗ってあげよう。
くにゅ、と師匠のペニスをつかむと。
「ぁ、ひっ！？」
師匠が高い声を上げてびっくりしてしまった。
「えっ」
思わずにゅこにゅことそのままましごいてしまう。
「ゃっ……モブ、だめ、だって……っ」
だめ？何がだめなんだろう。こんなに気持ちよさそうなのに。
口元を押さえて気持ちいいのを我慢する師匠は、すごく、色っぽくて。
「ぁっ……」
悩ましげに目を伏せてイくまで、僕は手コキしてしまった。
手についた師匠の精液を、僕はまじまじと眺める。
思わず、ぺろ、と舐めて。
「うわ馬鹿何してんだお前！」
師匠に手をゴシゴシ洗われた。
……ボディソープと混ざってすごい味した、けど、甘かった気がしたから、僕は相当、手遅れだ。
「ったく……前戯するなら、もう上がるからな」
師匠が、さっとシャワーを浴びてバスルームから出たので、僕も続く。
「俺で勃ちそうか？ＡＶ用意しようか？」
「いやなんでアンタで勃たないと思うんですか。僕が風呂場からずっと勃ってたの見てなかったんですか」
「……そうだったな。じゃあ、フェラするから、ベッド座って」
「えっ」
なんか、流れ作業みたいにフェラされるの、ちょっと嫌だけど……フェラ、されてみたい……！
「……お願いします」
師匠がローションを口に含んで。

ぬぼっ、と僕のを咥え込んだ瞬間。
「！？！？！？！？」
何がなんだか分からないまま、僕は射精していた。
「はれ？もう出ちゃっら？」
師匠が口を開けると、ローションと混じった薄黄色い精液がだらだらと溢れていく。
あっ……そうか、師匠の口に、出しちゃったんだ……。
「もしかしたら遅漏気味かな、と思って刺激強めにしたけど、杞憂だったみたいだな。ちょっと口ゆすいでくるわ」
じ……
自己嫌悪で、ＥＤになりそう……
そういえば。
「さて、次は何したい？って、んっ……」
昔、フェラした口にキスできるか、みたいなこと、この人、言ってたけど。
「余裕でできますね……」
「？」
というか、また口の中とろけるみたいに甘いし、どうなってんだこの人。
「……男の人とする時って、しっかりほぐさなきゃいけないんですよね？」
「ん？あ、まぁ、だけど……っう！？」
師匠をベッドに押し倒しながら、ローションをたっぷり絡めた指をゆっくりアナルに入れると、ひくっと師匠が腹筋を震えさせた。
「じゅんび、してきてる、からぁ……っ」
ゆっくりとナカをかきまぜる。
「でもまだ、ぜんぜんほぐれてませんよ。キツキツだ」
「それは……っ」
師匠が顔を赤くする。ほら、やっぱりちゃんとほぐしてないんだ。
「任せてください。ちゃんとトロトロにしてあげますから」
「いらな……っぁ、」
なんかコリコリしたものを触った。びくんと師匠がのけぞる。
「コレ、もしかして気持ちいいですか？」

「うんっ……きもちい、っから、さわ……」
「分かりました！」
いっぱい触ってあげますね！！
師匠が余裕なく喘ぐのが嬉しくて、僕はコリコリしたものをずっといじりまわす。
「あっ、あ！やだっ、いっ、イってるからぁっ！！」
「？」
師匠は身体を真っ赤にしてビクビク震えているけど、何も出ていない。
「イきそうなんですか？イっていいですよ」
そのままコリコリをぐりぐり触っていると、
……本気で師匠に睨まれた。
「モブ！！」
「はいっ！！」
師匠の本気の怒声に反射的に背筋が伸びて手を引き抜く。
「今すぐ！スマホで！メスイキを！調べろ！！」
「はいっ！！」
小指をシーツでぬぐってスマホを取りに行く。
めすいきを検索して、
「……あの、すみませんでした」
「わかればよろしい」
平謝りした。
「もうほぐしてあるから、挿れていいぞ」
「でも、ぜんぜんほぐれて無かったですよ……僕、師匠に怪我させたくないです」
師匠のことを思わない、他の人とは違う。僕は師匠がいいって言っても、師匠を傷付けることはしたくない。
「はぁ……モブ、指２本入れてみろ」
「えっでも」
「いいから、ほら」
師匠に誘導されるまま、小指と薬指を入れてみる。……キツキツだけど、すんなり入った。
「えっ」

「次は、３本」
言われるがまま、一度引き抜いた指を、今度は小指と薬指と中指３本まとめてゆっくり挿入する。
……入った。
「えっ師匠、これって」
「な、入るだろ？もう大丈夫だから」
「あの。師匠って、いわゆるめい」
「やめろって恥ずかしいんだよそれ言われるの！！」
……これ大丈夫かな。挿れた瞬間イったらどうしよう……。
「すみません、コンドーム、なんか分厚そうなコレにしてもいいですか」
イボつき！とか書かれてるやつだ。ウスピタよりはマシだろう。
「……いいけど」
師匠が微妙な顔をする。
「え、嫌ですか？」
「そうじゃないんだけどさ……ま、いいや。挿れてみれば分かるよ」
僕の手からコンドームを奪って、くるくると師匠が付けてくれる。
「……挿れますね」
ごくりと喉が鳴る。
「……ん」
ゆっくりと師匠の中に入っていく。
この、ひとが。
ぼくの、ものに。
涙が出そうになるのを、必死に我慢する。
「はいり、ました……っ」
ヤバい、感極まってるのもあって、すごく気持ちいい。
動いたら出そうだ。師匠には悪いけど、もう少し、このまま……
「ごめんっ、もぶっ」
ぎゅう、と眉を寄せて。
ぴゅる、と師匠が少し精をこぼした。
「え、っ」
その瞬間、凄まじいウネリに襲われて。

僕はあっけなく吐精していた。
「……そういう、コンドーム、イイところに当たるから……イっちゃうんだよ、俺」
いや。
いやいやいや。
「じゃあ、どうしたらいいんですか、僕」
思わず途方に暮れて師匠に訊いてしまう。
「……俺んナカに、避難所があるから、おぼえて」
よいしょ、と師匠が起き上がる。
反対に僕がぽすんと仰向けに押されて、寝転がった。
「勃ちそう？」
「あ、はい」
「ん、いいこ」
先端なでなでしないでください悪い子になりそうです。
今度は普通のコンドームを被せて、師匠は僕にまたがって膝立ちになった。
えっ騎乗位ですか……えっちだな……えっちなおねえさんだ……。
「挿れるぞ、ちょっと我慢しろよ」
ぐぷ、と呑み込まれて。
ぐうっと喉が鳴った。
「前立腺があるからって、腹側ばっか狙うなよ。……このへん、ヒダがあるから。最初は背中側をこすって……ここ。このへんちょっとゆるくて、何も無いから、イきそうになったらこの深さにしたらいい」
必死に頷く。レクチャー自体がエロくてイきそうなのを、これまた必死に我慢する。
「ここから先は、背中側の方が、ザラザラしてるから、角度変えて、こっち……っ」
ピク、と師匠が震える。
「すまん、腹側こすられると、どうしてもな……奥の方……この辺も、何もないはず。だけど、イったら搾るのは奥の方が激しいから、それは注意しとけ」
「おぼえました」

いやもうすみません。せっかく説明してくれたのに、なんですけど。
「イきたくない時はバリア張ります」
「……ま、それでもいいけどよ」
師匠、びっくりするぐらい名器じゃないですか。搾り取られる未来しか見えないので、小手先の技術は捨てます。無理。できる気がしない。
「じゃ、どうする？このまま騎乗位するか？」
「いや……正常位がいいです。僕が動きたい」
「そっか。分かった」
僕のを抜いてベッドに横たわる師匠。
僕は起き上がって、薄いバリアを張ってからゆっくり師匠に挿入した。
「ぁ……っ」
師匠がトロリと精をこぼす。
「……っん、モブのさぁ、イイとこに当たるんだよな」
妖しく笑う師匠が、お腹の上からぐっと性器を手で押さえてきて、色々ぶち壊しにしてくれそうになったので。
僕は師匠の両手を押さえてシーツに固定して、腰を振り始める。
「ぁっ、ああっ、もぶ、もぶ……」
「茂夫、って呼んでください。……新隆さん」
「わかっ、分かったからっ、イクっ、イクからぁっ、しげお……っ！」
「……イケばいいじゃないですか」
「……っ！」
ぎゅううと師匠が僕の手を握って身体を縮こませる。
師匠のナカがしまって、バリア越しなのにイきそうになった。
「っ茂夫、しげお、きもちい、きもちいいよぉっ、」
「僕もです、新隆さん、新隆さん、可愛い、」
もっとイかせたい。
もっと師匠を喘がせたい。
「〜〜〜っぁ、イク……っ」
師匠がおなかに精液をぶちまける。

ぎゅうぎゅううねるナカに耐えきれず、僕はバリアを厚くした。
「かはっ……」
師匠がイっても動き続ける僕に、悲鳴のような声が上がる。
師匠のピクピク震える足がシーツを引っ掻く。
「しげおっ、もう、いっしょに、イこ……？」
トロけた顔で言われて。
僕はもっと師匠をイかせたかったけれど、思わず頷いてしまった。
あまりに可愛かったので。
「僕の、新隆、僕の、およめさん、可愛い、かわいい、かわいい」
「ぁっ、あ、ぅんっ、うんっ、」
バリアを解除するタイミングをはかりながら腰を振る。
「あらたかはぁっ、しげおの、およめさん、だからぁっ、」
えっ
「しげおの、あかちゃん、うませてね……♡」
涙が止まらない。
師匠、任せてください。超能力でなんとかしてみせます。
「……しげお？」
「師匠、ナマでやってもいいですか？」
「……いいけど」
一旦抜いてコンドームを外す。
バリアを張ってナカに入って……バリアを解除した。
「んぎぎ……！」
すぐにイキそうになるのを我慢して腰を振る。
「〰〰〰っ、イク、から、しげおも、」
俺で気持ち良くなって？
そう言われて、我慢できず絶頂してしまった。ふわふわとした感覚が気持ちいい。
「……ししょお、あらたかさん、」
師匠の指輪を触りながら、トロトロとした睡魔に身を委ねる。
「幸せに、なりましょうね……」
「……うん」
優しく微笑む師匠に見守られながら。
僕は気持ちのいい眠りについた。

※

このホテルは朝食を部屋まで持ってきてくれる。
僕と師匠はおいしい洋食をつまみながら、これからのことを沢山話した。
どこに住みたいとか、両親への挨拶はどうするとか。
夢が膨らむ。
僕はずっとしあわせだった。

「じゃあ──ご利用、ありがとうございました」

その瞬間までは。

制限時間が終わって。
師匠は僕がはめた指輪を外して、エクボがくれた指輪をはめる。
「俺、プレゼント受け取らないことにしてるから」
指輪を受け取って、呆然とする。
そして──今更思い出した。恋人オプションをつけていたことを。
「師匠、ししょう……どこまでが、演技だったんですか」
「……全部だよ」
がくりと足の力が抜けた僕を慌てて師匠が支える。
「な、モブ、ろくでもないだろ？俺なんて。これで分かっただろ。俺はお前にふさわしく無いんだ」
なにを、なにを言ってるんだ、この人は。
「……犬にでも噛まれたと思って、忘れちまえ。嫌な思いさせて、悪かったよ」
なにを、言ってるんだ。
僕をあんなに幸せにしておいて。
こんなのって、ない。

※

「……兄さん、何か食べないと」

ドアごしに律が話しかけてくれる。
「ありがとう、律。でも食欲が無いんだ、ごめんね」
あれから３日。
僕は夜も眠れず、食事も満足にとれなくなっていた。
眠ろうとすると。
師匠の甘い声がよみがえる。
食事の思い出には。
楽しい夢がどうしても絡んで。
師匠を買って作ってしまった幸せな思い出が、僕を追い詰める。
「……ううっ」
がたん、と手が机に当たって。
ころん、と指輪が床に落ちた。
「これ、１００万円も、したのにな……」
この指輪を外して、安そうなエクボからの指輪を大事そうにはめる
師匠がフラッシュバックする。
「うっ、ううっ、ぐすっ、うううううっ」
スマホを起動して、一枚だけ撮ったデートの写真を見る。
僕の指輪をつけて、幸せそうに笑う師匠。

──ぷつん、と何かが、切れた気がした。

そうだ。
なんでこんな簡単なことに気が付かなかったんだろう。

……もう一回、買えばいい。

僕はスマホを手に取る。
「……もしもし」
師匠の声に心が躍る。
「Ｃコース、恋人オプションでお願いします」
ああ。
電源を切ったスマホを抱いて幸せな気分になる。
次は、どこに、デートにいこうかな。

さてと。
ご飯でも食べよう。

「シゲオ、塞ぎ込んでるってな？何したんだって律が怒ってたぜ」
「……いつも通り仕事しただけだ」
「お前のガチ恋営業はえげつないからなぁ……刺されんなよ？」
「大丈夫だ。今度こそモブは俺のことが嫌いになっただろうから」
遠い目をする霊幻。
……まーた甘いこと考えてんな？
仕事用の携帯が鳴ってびくりと震える霊幻。
「……はい、霊幻です」
ほーらみろ。
「……モブ、どうして……」
ぐす、と霊幻が涙声になる。
「……分かった。じゃあ、１週間後に」
ぴ、と携帯を切った霊幻にティッシュを差し出す。
「最悪だ。モブが風俗にハマった」
「だっはっはっは！」
悪いが腹の底から笑ってしまった。
「相変わらずだなぁ霊幻、常連を作るのが上手いこって」
「ふざけてる場合じゃねぇぞ。なんとかやめさせないと……もう、売らないって言ってしまおうか」
「やめとけ。ヤクザにバラされるか、シゲオに拉致られるかのどちらかだ。大人しく金を払うルールに則ってくれるならそうさせとけ。……なにしろお前は、一回ヤらせちまったんだからよ」
「……こんなオッサンの身体、実際見たら幻滅すると思ったのにな……」
「ケツは相変わらず名器だからな、お前。多少老けても仕事の威力はそんなに変わらねーだろ。それに……」
むくれる霊幻の髪をいじる。
「好きなやつの身体なら、関係ねぇだろ、トシなんて」
「いやいやいや。好きなら金で買うなよ。俺、ウリ辞めたいっつっ

てんのにさ」
ごもっともすぎてまた爆笑した。
「ま、シゲオにはそのうち引導を渡してやんよ。まずは残り２人の出方を見てからだ」
「はぁ……新規客３連続はキツいわ……だいたいねちっこいんだよな」
「がんばれ♡がんばれ♡」
「他人事だと思って……」
「まあまあ。ケツは持ってやるからよ」
ぽす、と霊幻が身体を俺様にもたれかからせてくる。
甘えたいのだろう。
俺様は霊幻を抱きしめて、しばらくゆらゆらと揺れていた。

続